

青海波

へ神代より光り輝く日の本や へ千珠満珠の世がたりを 今に伝へ
て陸奥の 千賀の塩がま煙りたつ 霞に明けし松島の へ眺めはつき
ぬ春の日の 潮の干潟をゆく袖に うつす薫りも懐しき 梅の花貝
桜貝 みるめの磯のあかぬなる 花の跡踏む夏山の 筑波が覗く
船の中 へ逢瀬の浦のさゝめごと いか浮名も立浪の うちこんでいる
真心に 待つとは恋の謎々も 解けた素顔の 夏の富士 へ清見の
沖や 三保が崎 まつに本意なき青東風に 憎やあし辺の片男波
その通路は星合の なかかけ渡す かさぎの へ天の橋立きれ戸
とは 裏表なる播磨潟 汐汲む海女のしるしとて みどりの秋を残
したる 恋は昔のうたひもの へアラめで鯛は 神の代に 赤目と召
されそめしより 蛭子の神の釣り上げし 二世のかための懸鯛に 縁
しを繋ぐ諸白髪 若やぐ尉と うば玉の 闇の景色は 漁火の ち
らりちらちら月の出汐に 綱引の声の 節も拍子も 一様に へヤン
ラ 月の名所は よそほかに 鳴いて明石の浜千鳥 ヤサホウヤサ
ホウ 主に淡路は気にかゝる 室の泊りを ソレ松帆の浦よ ヤサホ
ウエンヤ 面白や へ波も静かに 青きが原を なかにひかえて住
吉と 名も高砂の夫婦松 雪にもめげぬ深みどり 栄ゆく家の寿を
なほ幾千代も延ぶるなる 直ぐな心の清元と めでたく祝ふ泰平
の 君が余沢ぞありがたき。